

情報処理学会第 82 回全国大会 実録 緊急オンライン開催

岡部寿男 | 第 82 回全国大会運営委員長／京都大学

中沢 実 | 第 82 回全国大会プログラム委員長／金沢工業大学

全国大会オンライン開催を振り返って

2020 年 2 月、新型コロナウイルス感染症の拡大が始まった。第 82 回全国大会（2020 年 3 月 5～7 日）は急遽オンライン開催となったが、多くの方々のご協力に支えられ、大きなトラブルなく終えることができた。それから 1 カ月の間に多くのことが起きてその対応に追われる日々が続いているが、端緒となった、本会として初、我が国でも前例のない大規模なオンライン開催の経緯を、記憶が薄れないうちに記録として残し、事後の検証を行えるようにして今後につなげられるようにすることが大事であると考え、ここに報告の機会をいただいた。あえて美談とはせず逡巡した経緯や反省すべき点も包み隠さずに記載したい。

現地開催中止の判断に至るまで

2020 年の年初から新型コロナウイルス感染症の問題は騒がれていたが、開催 1 カ月前の 2 月上旬の時点でも、本大会の開催そのものに大きな影響があるとは予想できていなかった。2 月 18 日に DEIM2020（第 18 回日本データベース学会年次大会、3 月 2～4 日）、19 日には言語処理学会第 26 回年次大会（NLP2020、3 月 16～19 日）の現地開催中止とオンライン開催が決定されたのを受けて、

本会でも 20 日夕に臨時の大会運営委員会を招集して対応を協議したが、その時点での判断は基本は現地開催で、一部のイベントについて対応を検討するにとどまっていた。

しかしながら、翌 21 日午前になり改めて状況を分析し諸条件を検討、金沢工大側とも相談して、やはり現地開催は難しいとの判断に至り、会長の判断を仰いで本会として最終的に現地開催中止を決定した。最小限のアナウンスを起草し 15 時に Web 掲載し、メールや SNS などを通じて広報に努めたが、このときは「現在、プログラムの一部のオンライン開催などの可能性を検討しております」と書くのが精一杯であった。

なお翌週の 26 日に安倍首相が記者会見で以後 2 週間のイベント中止を要請し、本会に限らず 3 月に予定されていた学会のイベントはほぼすべてが現地開催を中止することになった。結果的に、21 日午前の時点で全国大会の現地開催中止を決断できていたことで、オンライン開催の準備のための時間が辛うじて取れたといえる。

オンライン開催の検討

21 日 17 時から再度緊急の大会運営委員会を招集し、善後策を検討した。現地開催の中止に伴う諸々のキャンセルの折衝は齋藤正史実行委員長に任せる

ことにして、運営委員と事務局でオンライン開催の可能性を探った。事前申込者には20日に講演論文集のダウンロードURLが通知済みであり、発表は成立していると考えて、単なる中止にしてしまうという選択肢もあった。しかし、講演発表者の方々に對して学会としてベストエフォートであっても何か発表の場を提供することが使命であろうと考え検討した結果、一般セッション・学生セッションについてインターネットを介したビデオ会議システムを使ってオンライン開催を実施する可能性が見えてきた。

全国大会は、例年であれば参加者数が3千人を超えるかなりの大規模学会である。オンライン開催の場合の参加者の見積りは難しいものの、セッション数153、講演数1,135という大きい数字を扱わねばならないことは疑いない。しかし、各セッションの発表数は最大9であり、セッションの参加者は通常開催の場合は1教室に収まる30人くらいと規模は大きくない。オンラインのセッションの場合、発表者、座長、聴講者がセッション会場に対応するビデオ会議に遠隔参加し、発表者が画面共有を使ってプレゼン資料を提示しつつ話せば通常と同等のことができる。オンライン開催を元のプログラムと同じセッションに時間を組むことにしてセッション会場の数と同じ31並列のテレビ会議開催ができる契約をすれば、原理的には完全オンラインの開催が可能である。

一方で、懸念される点もあった。一つは、参加者がビデオ会議でのプレゼンに慣れていないことである。単なる会議ではなく画面共有やチャットなどを駆使したものであり、発表者や座長に大きな負担をかけトラブルも予想される。もう一つは、サポート体制が不十分であることである。通常であれば開催校の学生にアルバイトをお願いして座長のサポート業務を行う。しかし今回は新型コロナウイルス感染症の拡大防止を考えると、当日何十人ものアルバイト学生をどこか1箇所に集めて作業させるようなこ

とは避けるべきであるし、オンラインで作業してもらうための機材の手配や講習も難しい。

以上のような技術上・運用上の課題は見えていたものの、「情報」を冠する学会としてできることはやるべきという考え方で、試行等ではなく正規のセッションとして開催し、大会優秀賞等の表彰の対象とすることにした。一方オンラインの発表が難しい講演者がいることを考え、発表そのものは講演論文集の公開をもって成立しているものとした。オンライン開催は参加登録（講演参加、聴講参加）している人だけが参加できる形とした。

ビデオ会議システムとしてはZoomを使うことにした。Webで簡単に申し込めて、1カ月だけであれば余裕をみて40並列、1会議当たり最大300人の契約をしても10万円未満に収まった。

週末に簡単な技術的検証を行い、大きな問題は見つからなかったことから、25日午後にオンライン開催に関して正式のアナウンスを出した。その後、イベントセッション1企画について同様にZoomを使うことになったほか、「先生、質問です!」公開セッションはclusterというバーチャルリアリティ環境で開催、また中高生情報学研究コンテストはインターネット上のポスター公表とオンライン審査を行うこととなった。

開催準備

26日に、講演発表者と座長に、オンライン開催のお願いと可否を問う連絡を行った。座長に加えて、万一座長が接続できなかった際の代理のほか座長業務を手助けする「座長補佐」をお願いすることとし、その選任もお願いした。当然ながら、運営上の不備や懸念について多くのお叱りやご指摘をいただいた。一方でオンライン開催に対する激励や期待の声もいただいたのはありがたかった。

次に、オンライン開催ならびにZoom接続の案内をWeb上に用意した。内容は随時更新の必要があ

ることからポータルサイトを Google サイトに開設し、それ以外の文書も Google Drive に置いて関係者で編集権限を共有した (図-1)。また IOT 研究会のオンライン開催を準備していた中村素典・京大教授より、Zoom 接続の手引きのドラフトを入手し、全国大会用にカスタマイズして利用させてもらった。それに加えて発表者、座長、聴講参加者それぞれの立場で、スライド共有の方法や質疑応答の手順などを文書化し順次掲載していった。ポータルサイトは 28 日に公開し、合わせてオンライン開催になったこととお詫びとご協力をお願いを掲載した。

開催当日

Zoom に不慣れな参加者に対する対応として、開催前日と会期中、学会事務局でサポート用の Zoom を立ち上げておき、そこで接続テストや質問に対応することとした (図-2)。数えている余裕はなかったがとても多くの方がきちんと事前に接続テストを行ってくれた。また運営側でも接続に伴うありがちなトラブルの情報を共有することができた。事務局にはかなりの負担であったと思うが、これがトラブルを減らす鍵になったと思う。

当日の各セッションの運営は基本的に座長にお任せし、裏方として学会事務局が Zoom と電話で対応

にあたるほか、金沢工大と京大とにそれぞれ学生アルバイト少数名からなるサポートチームを置き、各セッションを巡回させた (図-3)。

当日の参加者数を正確に数えるのは難しいが、いずれかの形で参加登録した人の合計は 2,419 名となる。発表数の最も多い第 2 日目の午後は 29 のセッションに総計 614 名が同時参加していた。参加者数最多のセッションは 37 名であった。当日聴講参加登録者は 193 名であり、オンライン開催だったので参加できたという声も多く聞かれた。

オンライン開催に切り替えたことで、予稿に掲載された講演発表 1,135 件中オンラインでの発表を行ったのは 753 件にとどまった。発表が行えなかった理由として、企業の方はオンラインでの発表許可を取り直す手続きが間に合わなかった、学生の方は感染症対策により大学への登校を制限され発表準備が行えなかった、などを聞いている。結果として、少数ながら一部のセッションで発表数が非常に少なくなってしまう、発表者と座長にご迷惑をかけてしまったことは申し訳なく思う。

反省と今後に向けて

準備に手間も暇もかけることができず用意した最低限のサービスではあったが、発表者、座長、聴講

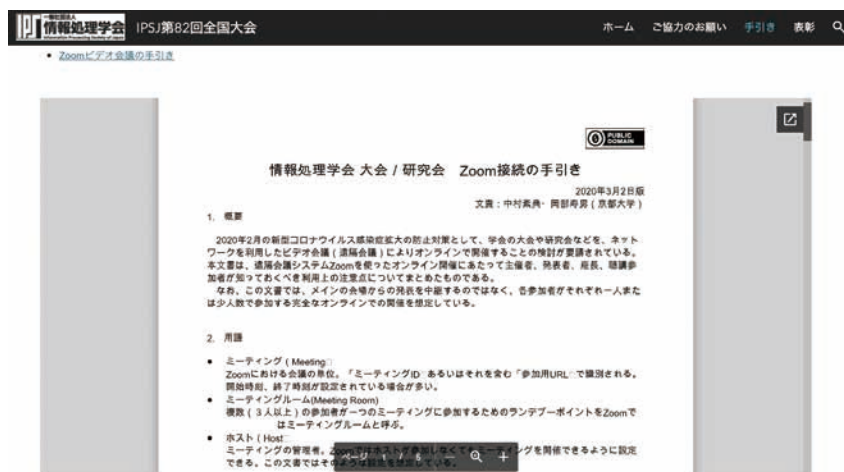


図-1 オンライン開催ポータルと Zoom 接続の手引き



図-2 オンラインサポートの様子 (学会事務局)



図-3 金沢工業大学でのサポートの様子

者各位がコンセプトを理解され臨機応変に対応くださったおかげで、幸い大きなトラブルなしに終えることができた。改めて御礼申し上げたい。またスポンサーのみなさまにはオンライン開催に切り替わっても支援を継続いただき感謝している。プレナリーセッションなどのアピールの場を提供できなかったのは反省点である。

2020 年度に入っても引き続き学会のイベントをはじめ諸行事がオンライン開催に切り替えられている。座長から運営上の課題や改善意見を挙げていただいたので、別の機会にまとめて公表し参考となるようにしたい。また紙面の関係で技術的な話題は割

愛したが、IOT 研究会にて発表予定である¹⁾。

この間の大きな変化を振り返ると、果たしてこれが会誌に掲載されるころに世界がどうなっているのか、想像するのも恐ろしい。一日も早くコロナ禍が収束することを願う。

参考文献

- 1) 柏崎礼生, 坂根栄作, 込山悠介, 中沢 実, 岡部寿男: COVID-19 に対する参加者数 500 人超級の学会イベントのオンライン開催の知識共有, 情報処理学会研究報告, 2020-IOT-49 (発表予定)。

(2020 年 4 月 3 日受付)

第 82 回全国大会ゴールドスポンサー



第 82 回全国大会シルバースポンサー

